

683
273

仙厓和尚

小島文鼎著

683-273



1200501578096

Small white label with yellow lines, partially visible on the right edge of the book cover.

仙厓和尚



納本

683
273



仙居
和
尚





仙厓和尚慈像

本
寺
藏





仙厓和尚慈像

本
寺
藏

鶴曰鶴而不細也而不射客

聞其聲不忍食其肉

明乎之世也即之言者天下

若有二人如布牛鹿

世之世也如美人之容人之性也如

吾人之性也子曰不肖者見之大笑

牛龜家可嘆

仙居和尚筆



仙厓和尚筆鶴龜圖

本寺藏

論曰鶴而不網火而不射宿

聞其聲不忍食其肉

則聖之言也聖之言者天下

若有一人如布衣也

世之書畫如美人雲人之嘆屋蓋如軒者

牛龜家可嘆



仙厓和尚筆

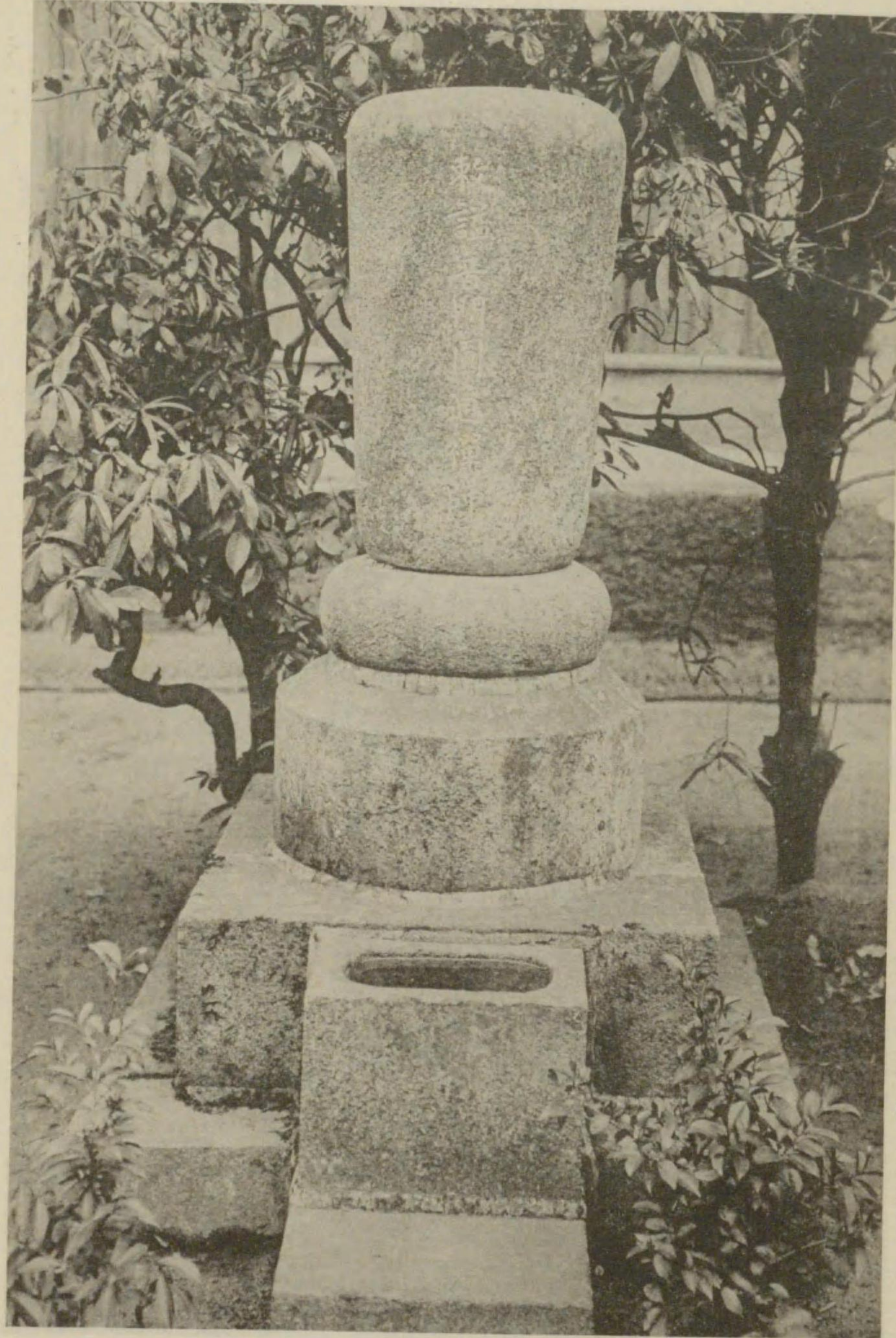




仙厓和尚靈塔

本寺塔頭護聖院





仙厓和尚靈塔

本寺塔頭護聖院

683-273

目次

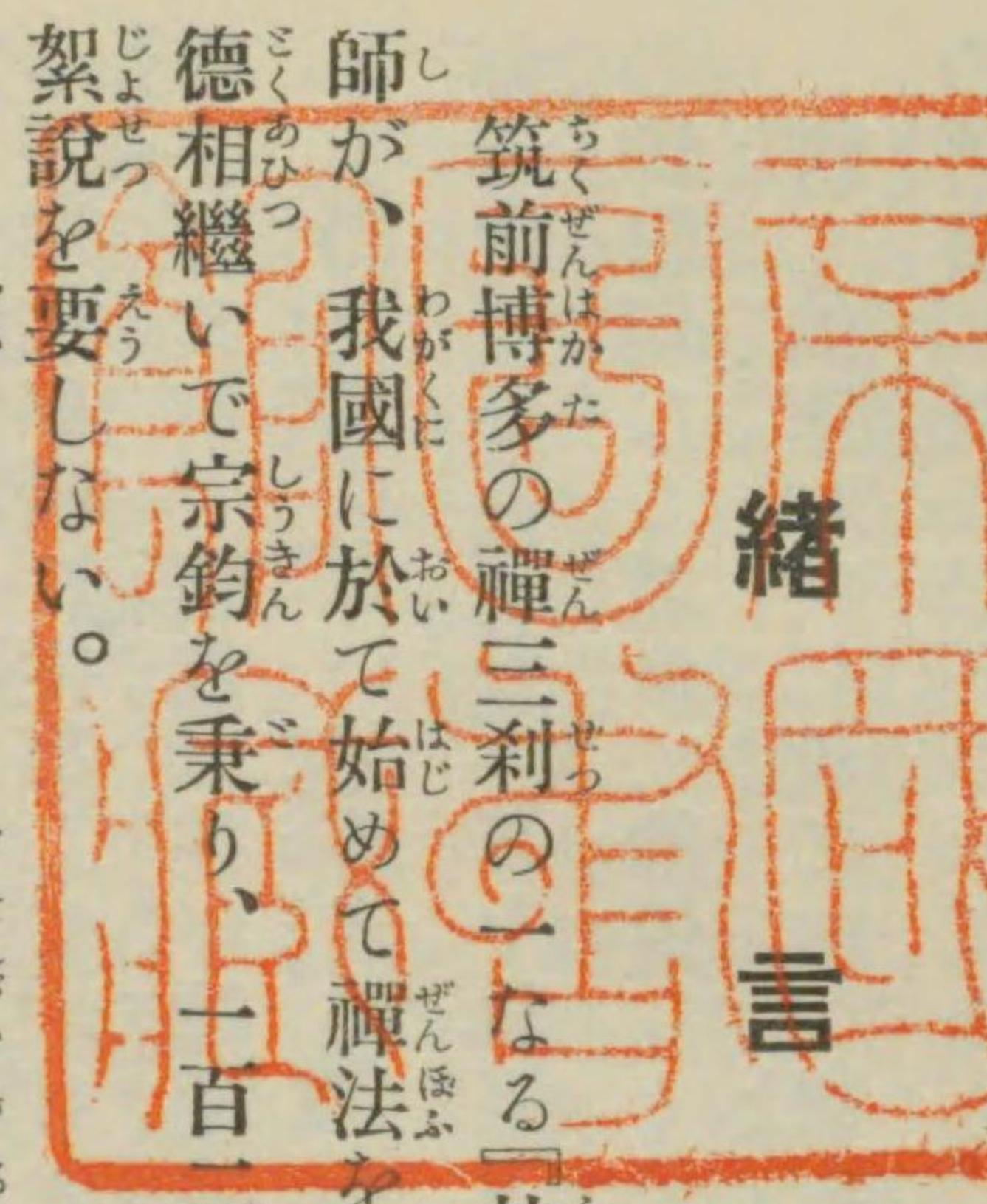
| | |
|-------------|----|
| 緒言 | 一 |
| 一、生ひ立ち | 三 |
| 二、行脚、東輝庵に掛錫 | 五 |
| 三、月船と其門下 | 五 |
| 四、苦鍊と大事了畢 | 七 |
| 五、雲水の旅 | 八 |
| 六、庵居と追放 | 八 |
| 七、太室と仙桂 | 一〇 |
| 八、太室と戒壇院 | 一一 |
| 九、太室の招書 | 一三 |

| | |
|------------|----|
| 十、筑紫行脚 | 一五 |
| 十一、聖福寺晋山 | 一六 |
| 十二、誠拙の忠言 | 二二 |
| 十三、苦禪堂と其略鑑 | 二三 |
| 十四、法嗣 | 二五 |
| 十五、靖退と再住 | 二七 |
| 十六、紫衣を固辭す | 二八 |
| 十七、觀音大士の靈感 | 二九 |
| 十八、潛行密用 | 三〇 |
| 十九、書畫と文藻 | 三三 |
| 二十、攝化と語言三昧 | 三五 |

| | |
|----------|----|
| 二十一、交遊 | 三八 |
| 二十二、遷化 | 三九 |
| 二十三、謚號宣下 | 四〇 |

目次終

仙厓和尚



筑前博多の禪三利の一なる「扶桑最初禪窟」安國山聖福至仁禪寺は、開山千光祖師が、我國に於て始めて始めて禪法を宣揚し給ひたる最初の古道場にして、爾來名匠碩德相繼いで宗鈞を乗り、一百二十九世七百有餘年來、法燈の赫奕たることは今更

その第一百二十三世仙厓和尚は、道徳學識一世に高く、世出世の瞻仰して已まざる所であり、緒餘の事業としての文藻書畫の如きも、世既に定論のある所である。

和尚は、天保八年丁酉十月七日を以て寂滅を示され、今茲一百年遠諱に正當するを以て、聖福寺にては、大法要を營んで慈恩に酬ひ奉ると同時に、其芳躅を

檀徒信徒は勿論、普ねく天下に昭示して、精神修養の一助とも爲さんと欲し、爰に御略傳の編纂を企てらる。

之に因り現山主劍光室謙道大和尚は、去る二月十七日遙々洛に入り、得々として老拙が草庵を叩き、之が執筆を命せらる。老拙は固より文筆に衣食する底の學究に非ず、又仙厓和尚に就ては、從來何等研究を費したることもなく、且つ近頃は寺子屋式學校に従事して、日々劇忙を極め、全く操觚の暇なきを以て、堅く辭退申上げたが、老拙は往年聖福寺の道場で貴重な麥飯を十餘年間食ひ潰し、其飯錢をも得支拂はない債務者で、その補償の爲、曾て先汲古老漢の嚴命に依つて、『聖福寺史』『聖福眞觀』等を執筆させて戴いた因縁に因り、是非共——といふ大和尚の御懇切なる尊命に餘儀なくせられ、遂に謹諾した。

併し仙厓和尚に就ては、輒近一、二の専門的學者が詳細なる研究の結果、種々の著書が既に公刊されてあり、其餘の月刊雜誌杯にも、大同小異乍ら和尚の事蹟や逸話は所々に散見してゐるから、老拙が書かんと欲する所、述べんと欲する所

は、最早述べ盡され書き盡され、劔去つて後、舷を刻むの愚を學ぶに等しきものである。

たゞ聖福寺の立場として、單に世俗に徇はず時好に阿らず、少々は難つかしいかは知らんが、宗門の面目を潰さない程度に筆を把つて、聊か大和尚御懇囑の盛意に奉答せんとする次第である。

一 生ひ立ち

和尚諱は義梵、字は仙厓、別に百堂、阿摩訶和尚、虛白、無法齋、退歩、瓢化房、天民、保和堂、玄雄堂等の號があり、又遺墨を拜見すると、七十餘種の落款が隨時に用ひられてゐる。謚號を普門圓通禪師と曰ふ。

寛延三年庚午四月（日不詳）、美濃國武儀郡谷口村の農家河村甚七氏の三男として生れられた。

同村の豪農山内氏、夫妻の間に子なきが故に、師の聰明を愛して己が養子とし

て貫ひ受けた、生長するに随つて天稟の穎才は次第に發達し、草深き美濃の農村で一生を終らしむるは惜い事と養父も考へ、師も亦夙に出家の志があつたので村内の汾陽寺へ送つて空印の弟子とした。

此の汾陽寺は、妙心寺派東海門派の名刹で、清泰、龍門、道樹、龍吟、陽徳、龍福等諸寺の輪番地であつたが、その清泰寺の空印が輪番中、汾陽寺に於て、師を『將來の法器』と深く見込んで弟子に貫ひ受けた、其時空印は、

『この寧馨兒を獲たことは、老僧が輪番中に於ける一大收穫であつた』
と迄人に語つて悦んだといふことである。

それより師は空印の温かき慈悲の懐に育くまれ、十一歳の寶曆十年、清泰寺にて空印を拜して剃髮得度した。

空印剃度の弟子は、嗣席の瑞巖を筆頭として、七十六人の多數であつて、師はズツと其末位らしかつた。

得度を受けて三年目の寶曆十二年四月、本師の空印は五十九歳にして、迦葉弟

子の瑞巖に法席を譲り、其創建した薬師寺に退いた。因つて師は更に瑞巖の教訓を受くることゝなつた。

二 行脚、東輝庵に掛錫

明和五年戊子、年十九の春を迎へて撥草瞻風の志を發し、包を負ふて東下し武州永田の東輝庵に掛錫して月船の輪下に投じた。

然るに美濃から永田へ行く迄の東海道筋には、原驛の松蔭寺に、臨濟正宗の中興五百年間出の大闡提白隠老漢が、塗毒鼓を懸けて英靈底の漢を待ち侘びつゝあるに拘らず、其門前を素通りして、より遠い永田迄無駄な草鞋を踏破つた所以は、本師空印と月船との間に絡まる、古月門下同參の宗盟を尊重したが爲であつた。

三 月船と其門下

月船諱は禪慧、奥州は岩代國田村郡小野村の産で、幼年より郡の高乾院北禪に

六
師事し、日州古月の正印を佩びて後、高乾に嗣住すること十年、去つて永田に抵り、東輝庵を開いて大に宗風を振起し、天明元年六月十二日、八十の崇壽を以て遷化した。

後年仙厓和尚が『武溪安居の圖』を繪き、其上に

『子育韻象、絶無慈心、近傍喪身失命、噫武溪多毒淫』

と題讚した所に據れば、月船の家風の峭峻なることが窺はれるであらう。

當時其輪下には、物先、實際、誠拙、竺源、太室、龍雲等、一騎當千の勇者が轡を並べ、同聲相應じ同氣相求めて精鍊苦修を是事としてゐた。

是等の先輩が、師の教ゆべきことを見て、常に懇切に激發した、殊に誠拙は取分け鞭撻を吝まなかつた。

師住院の後、其當時を追懷して、

『衲の今日あるは、法兄の誘掖に得る所大なり』
と感謝の意を表してゐる。

四 苦鍊と大事了畢

斯くて師は眞參實究、殆んど脇、席に貼かず、己事究明の外更に餘念がなかつた。
『香嚴樹上』の話を看るに及んで、刻苦精勵、朝參暮請、幾度か見解を呈すれども許されず、懊惱多時、一日不合に『樹下の一句』に撞着し、一偈を打して月船に呈した。

『釋迦入滅二千歲、彌勒下生億萬年、大地衆生難委悉、從來鼻孔掛唇邊』
月船之を見て激賞し、更に將來を警戒した。

是より見處痛快、一關は一關よりも高く、一機は一機よりも鋭く、一境は一境よりも豁く、遂に最後の重關を打破して、月船の印記を獲得した。

七
明和五年十九歳にして東輝庵に掛錫し、三十二歳の天明元年迄、十四年一日の如く大法の爲不惜身命の苦行を積み、月船折脚鐺中の沒滋味の滋味に壓飲して、霜辛雪苦の犠牲は爰に始めて酬ひられたのであつた。

五 雲水の旅

天明元年月船の遷化に因つて、一ト先づ東輝庵を辭し去り、風餐露宿、身を行雲流水に托し、先づ程遠からぬ鎌倉圓覺寺に登りて法兄實際に謁し、錫を轉じて江戸に入り、或は講肆に遊んで内典外籍を究め、常野の野を過ぎて松島に遊び、更に越路を経て近江に入り、長濱在の良疇寺に留踵し、同寺に安置する聖徳太子御作の觀世音菩薩の像を寫して

『殺人劍兮活人劍、任手彫成大士相、聖徳元來觀自在、應身面目露堂堂、』と讚したもののが今に同寺に存する。

それより桑梓の地美濃に歸つて、本師空印を省觀し、一時受業の舊院清泰寺に留止した。

六 庵居と追放

其中或る人の推薦に因つて、大垣の一小無住地に庵居することゝなつた。時に藩政甚だ紊亂して家老の交迭頻繁に行はれ、領民大に苦しみつゝあるのを見兼ねた師は

よからうと思ふ家老は悪からう

もとの家老がやはりよからう

といふ一首を、人通り多い町の一角に貼付けた。

之を見た藩廳では此の不埒千萬の悪戯は、何人の仕業であるかと嚴しい詮議の結果、師であることが判つたので直に追放の處分を申付けた。すると師は

傘をひろげて見れば天が下

たとへ降るともみのはたのまじ

の一首を残し、即日飄然として去つて東下し、再び永田の東輝庵に赴いた。

此時東輝庵は、先輩の物先が月船の玄化を紹いで、方來の雲衲を接得してゐた、師は尙ほ物先に請益して悟後の鍊磨を怠らなかつた。

七 太室と仙桂

斯くして衆流に陸沈しつゝありし師の身邊に、俄に一大轉機が勃發した。

その導火線を布いた者は、戒壇院の太室で、其又直接工作に當つた者は見性寺の仙桂であらう事を想像する。

今些しく二師の事を紹介して見やう。

太室諱を玄昭と曰ひ、肥後國內牧の人にして熊本見性寺清巖の弟子と爲り、月船、蘭山二老に參じて、後蘭山の法を嗣ぎ、寛延三年(仙厓和尚生誕の年)五月、年二十五にして見性寺第六世の法燈を挑げ、僧堂を開いて四來を攝化した碩匠である。

丈室に端居すること二十三年、安永元年八月松月軒に退隱し、天明六年戒壇院に遷り、寛政五年四月迄八年間在住し、同八年八月七日、世壽七十一にして松月軒に歸り示寂した。

太室は曾て月船の門下に在れども、兎に角仙厓和尚とは二十四年の年長者であるから、同時の兄弟なるや否やは甚だ疑問とする。

が、茲に一つの奇しき因縁が結ばれてゐるのは仙桂玄識其人である。

仙桂は濃州清泰寺空印の弟子七十六人中の一人で、太室に迎へられて其後輩と爲り、見性寺第七世として、安永元年八月より寛政十二年二月迄在住し、同月二十六日七十七にして示寂した。即ち仙厓和尚とは十年の長ある法兄である。

八 太室と戒壇院

太宰府戒壇院は、聖武天皇の勅願所で、奈良の東大寺、下野の薬師寺と共に、日本三戒壇の一に數へられ、唐僧鑑真大師が始めて此處に授戒を行ふた靈蹟である。

中古博多の眞言宗東長寺に隸屬してゐたが、安永二年時の院主法潤が罪あつて擯斥せられ、爾來十四年無住であつた處、天明四年藩廳から聖福、承天、崇福の

禪三刹に囑托して、輪番制と爲つた。

(因みに明治以後聖福寺に專屬した。)

乃で崇福の輪番に際し、太室は崇福の德隱和尚から懇招を受けて、天明六年八月、同院へ移つたのである。

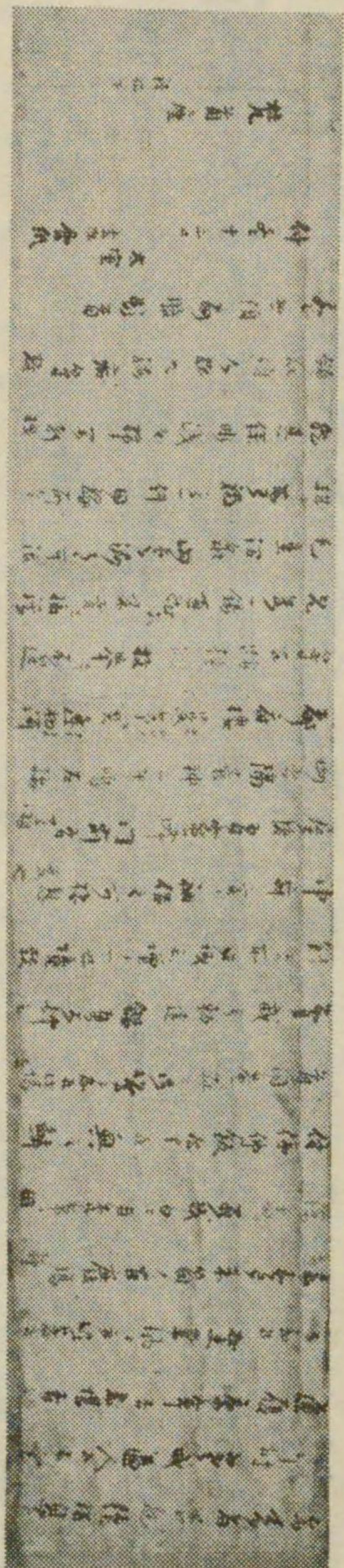
三刹に關係のある戒壇院の事とて、太室は聖福へも常に往來して温かき法盟を結んだに相違ない。

時に聖福第二百二十二世盤谷和尚は、七十有餘の高臘に達し、英材を得て其後を托せんとする意思の切なるものがあつて、其儀の相談を腹藏なく太室に持掛けられた。

太室は豫てより仙厓さんを認識してゐる所から、直に之に白羽の矢を立て、其招致に關する直接工作は、先に述べた通り兄弟の親しみの關係上、仙桂に當らしめたものではなからうか、之に因つて仙桂は、東輝庵に雌伏中の仙厓さんに幾回か書信の往復を累ねたものと思へる。

九 太室の招書

太室は和尚の點頭の遲きに瘳れを切らし、天明七年仲冬、自ら書を裁して、それとはなしに和尚の來錫を促した、左に本寺所藏の書簡の全文を示す。



藏寺本息向和室太

爾來者杳然絶消息候、即時寒威逼人候、不審、道履康寧否、不堪杳然之至、拙夫業風に被吹着候而、去春(天明六年)已來古廢場に掃除番に罷越、日々與禿帝同伴偷佛飯居申候、奥の鱗首(座)同庵、毎々御尊ニ及候、此場ハ聖武之勅建鑑真大師之創スル所、日域三壇ノ一也、境致常寂、實ニ衲侶之可棲息處也、屋

後有竈峰、門前有天拜山、右隔菅神一牛鳴、左接都府樓、芟茅關、逢判河等、古跡往蹤枚舉スルニ不遑、兄若一錫惠然ト來賁セハ、摘溪毛烹澗泉、山雲海月可話、殊ニ聖福之一件、因緣所令然、其係非淺々、掃閑軒拽領以待、心緒如縷、病筆難盡、惣附面晤、頓首

仲冬十三日

太室 玄 昭 合 爪

梵 首 座

禪 榻 下

此書簡に據れば、太室は聖福問題に就て是迄に和尚と何等の交渉をも打してゐないことが判る、そして此の書簡では問題に觸るゝ所は、『殊に聖福之一件因緣所令然其係非淺々』の一語に過ぎない。

斯んな簡單な然も不得要領な一書簡で、『聖福後董』といふ重大問題が解決すべくもなく、和尚の鬚鬚子を動かさし得べくもない、故に編者は本問題に就ての直接交渉は、仙桂が之を行ふたものと信するのである。

要するに太室が和尚を見込み、仙桂が之を取持つたもので、和尚の博多に法幢を建立されるに就ては、隠れたる大なる力として、此の太室と仙桂と二人の存在を忘れてはならない。

十 筑紫下り

此の問題に就ては、洒々落々の和尚も、輕舉妄動を避けて餘程慎重に考慮を費した結果、最後の太室の招書に動かされて遂に筑紫下りを決心したに相違ない。

それは必ずしも九州山水の美に憧れた計りでなく、日州は法祖古月の開法の地、小倉は法叔蘭山が宣化の地、戒壇には先輩の太室あり、見性には法兄の仙桂あり、和尚としては極めて法縁濃厚の國土である。

殊に『扶桑最初禪窟』は、日本最古の靈域として、和尚の崇敬措かざる所であり、且將來の活躍舞臺として最も意義ある背景であつたからであらう。

天明八年戊申春、東輝庵を出發するに臨み、左の一偈に依て其心境を表明した。

戊申春欲趣九州作

塚間林下是吾家、春暖石床解結跏、四海九州一衣鉢、飛禽何處不_レ含_レ花、

筑紫へ到着せられたのは四月中旬頃であつた、先づ戒壇院に登り、太室に見えて一偈を呈した

戒壇院上太室和尚

練若高僧住、瀟灑絶世縁、六環孤頂月、一鉢野村煙、
身奉南師律、心傳西祖禪、定餘何所作、欲看感通篇、

十一 聖福寺晋山

筑紫下りを遂げた和尚は、初めて聖福盤谷老師に相見して、機々々々相投じ、命を稟けて法席を繼いだ。

此時盤谷は七十五の高齡であり、和尚は三十九歳であつた。

盤谷は四月二十四日附を以て『仙厓和尚御國住居願』といふものを藩の奉行所へ差出して、他藩の者が、筑前の黒田藩内に住居することを出願した、恰度今の『寄留届』である。

住職就任の月日は不明だが、此年秋頃住名を帯びたものらしい。

四十歳を迎へた寛政元年己酉正月には、『歳旦上堂』と稱して、聖福寺の法堂須彌壇上に登つて、祝聖説法の盛儀が行はれてゐる。其法語を左に具載する。

回祝 聖

大日本國、西海道、筑前州、扶桑最初禪窟、安國山聖福禪寺

住持沙門 義梵

改端令辰、爐中焚_レ香、恭爲祝延

今上皇帝聖躬萬歲、萬歲、萬萬歲

陛下

恭願

明寶曆唐虞歲、齊_ニ寬政禹湯民_ニ

回索語

載陽行青道、羲仲宅嵎夷、此是扶桑最初一氣、作麼生是、禪窟最初句、有道得底麼、

回提綱

春回西都、新松柏綠千歲、雲擁北闕、遍雨澤恩九州、龜鶴呈祥、麟鳳現瑞、丹鼎藥煉竈門靈窟、紫府書受洞天神仙、不問壽齡南辰、謂之蓬萊在東海、天長地久、時康道泰、於此天子垂拱無爲、黎民齊受其錫、豈力伏敵國、足稱神化功、祝人王便得、法王如何祝、豎拂曰、喻如優鉢羅華時一吐芳

回自叙

梵上座

鈍質小機、如鵝笑鵬翼、薄德狹量、似鷄棲鳳巢、何堪住山應化之任、慚汗慚汗

回謝語

伏惟

闔山上首幻住法兄禪師

首僧伽六和、進止同大迦葉、住如幻三昧、似老中峰、倒刹竿弟阿難陀、坐天目壓義崖、(一字)

次惟

護聖塔主禪師

降九淵龍、常護先聖之鉢、添千光焰、長挑祖室之燈。

次惟

常住知事順心主位禪師

逆順心無二、補吾三寶常住闕、緇素善歸一、應他十方檀信供。

次惟

山門東西兩序、適來問話禪客、一會海衆諸位禪師

大巧如拙、各抱可登庸才藝、至辯如訥、自慎不可爲言、持松栢操、亭亭蓊鬱、含璧玉詞、瑳瑳玲瓏、克悟徹此事、盡是叢

林、狡狴。

回拈提

復舉、開山祖師、在大宋日、因謁虛庵禪師萬年、庵曰、傳聞日本密宗甚盛、端倪宗趣一句如何、師曰、初發心時便成正覺、庵曰、如子所言、與吾宗不別、梵上座謂、庵潦倒萬年、憐兒不覺醜、殆將使吾宗墮他教理、山僧若在萬年、待他纔開口、驀與一掌、何故、扶桑人不解華言、雖然如此、端倪宗趣、又作麼生、卓拄杖曰、會麼、若夫不會、我有陽春一曲、要諸人和得同、春遍九州西盡邊、海山一錫本隨緣、曉來移座東窓下、閑讀興禪護國編、咄、久立珍重。

翌寛政二年八月、四十一歳にして本山に登り、轉位垂示式を舉行し、三年には受業寺清泰寺開山大圭和尚二百年遠忌に就て行はれた碧巖集會に、態々影響荷擔してゐられる。

十二 誠拙の忠言

和尚が本寺を司るや、同參の先輩誠拙は、遙々鎌倉より雁書を寄せて、大法の爲に和尚の攝化を激勵した、誠に宗盟の厚い事である、左に聖福寺所藏の消息全文を掲げて、誠拙の面目を看んとする。

時候御自玉專要奉黙祈候

御萬福ト奉賀候、扱而今時叢林之風情甚以氣之毒、貴座下儀者、當時文質之師也、殊ニ大叢林也、石霜師も歸郷、被仰合御荷擔可被成候、去歲不肖豫州ニ而、林才録拜提候節、性堂會裡坊主七十八人參處、性堂兼而林才録氣ニ入不申、處々改更、國字點ヲ付ケなをし、色々新語出し候條(一字)難讀、當時好智識無之過也、物老耆相應之仁物なれど、眼疾得ト無之無業師性急、坐源遠行、當時江湖ヲ一見致ス處、一向其人ヲ不見、是以、座下等被仰合、托鉢被成候而も、一ケも大勢被支置、御世話可被下候、不肖者、年來世話致ストモ、

從來疎懶性質、殊ニ近年尙々無性ニ相成、物之用ニ立不申、必隱居ノ樂ヲ好ム事莫レ、龍安の眼公も些子指を染候得共、達磨ノ爲ニ只今罷歸リ隨侍候由、兎角早く寺持の相談、禪者ノ大病、叢林大衰也、餘不レ克三禿毫一候

八月十八日

樗誠拙九拜

上 聖福和尚

現代の衣架飯袋子にも好箇の點眼藥である。

十三 苦禪堂と其略鑑

和尚の出世は、決して浮華虚榮の爲ではなかつた。和尚の肚裡には大法興隆の外、更に何物もなかつた。故に其德馨の薰發する所人天を聳動し、天下の龍象を狂奔せしめずには置かなかつた。爐鞴に投ずる鈍鐵は、雲の如く水の如くに輻輳した。斯く成るからは、是非一つの禪堂を設置せねばならなく成つた。

然るに本寺は、『扶桑最初禪窟』の勅額は堂々たれども、其庫下は極めて冷淡々空索々で、常に僧糧に乏しく、日々衆僧の托鉢の歸りを待受けて、典座さんが瀉粥を炊くのが例であつた——此の状態は、先汲古老漢の初期迄も續いたが、和尚の時代が最も甚しかつたと云ふ事だ。

併し『食あれども法なき所には住すべからず、法あつて食なき所には住すべし』と古人は訓戒を貽してゐる、和尚は固より此の遺訓の服膺者であるから、此點は初めから些し問題にして居られない。

所が今や禪堂建設に臨んで、其資金の出所がある筈はない、因つて檀徒信徒中の篤志者から若干の淨財を集めて、厩かに落成したのが即ち『苦禪堂』である。

『苦禪堂』とは、屋根も四方も苦を以て覆ひ、障壁の設備なく、厩かに風雨霜雪を凌ぎ得る程度の建築物なるが故に、人皆『苦禪堂』と稱へた。

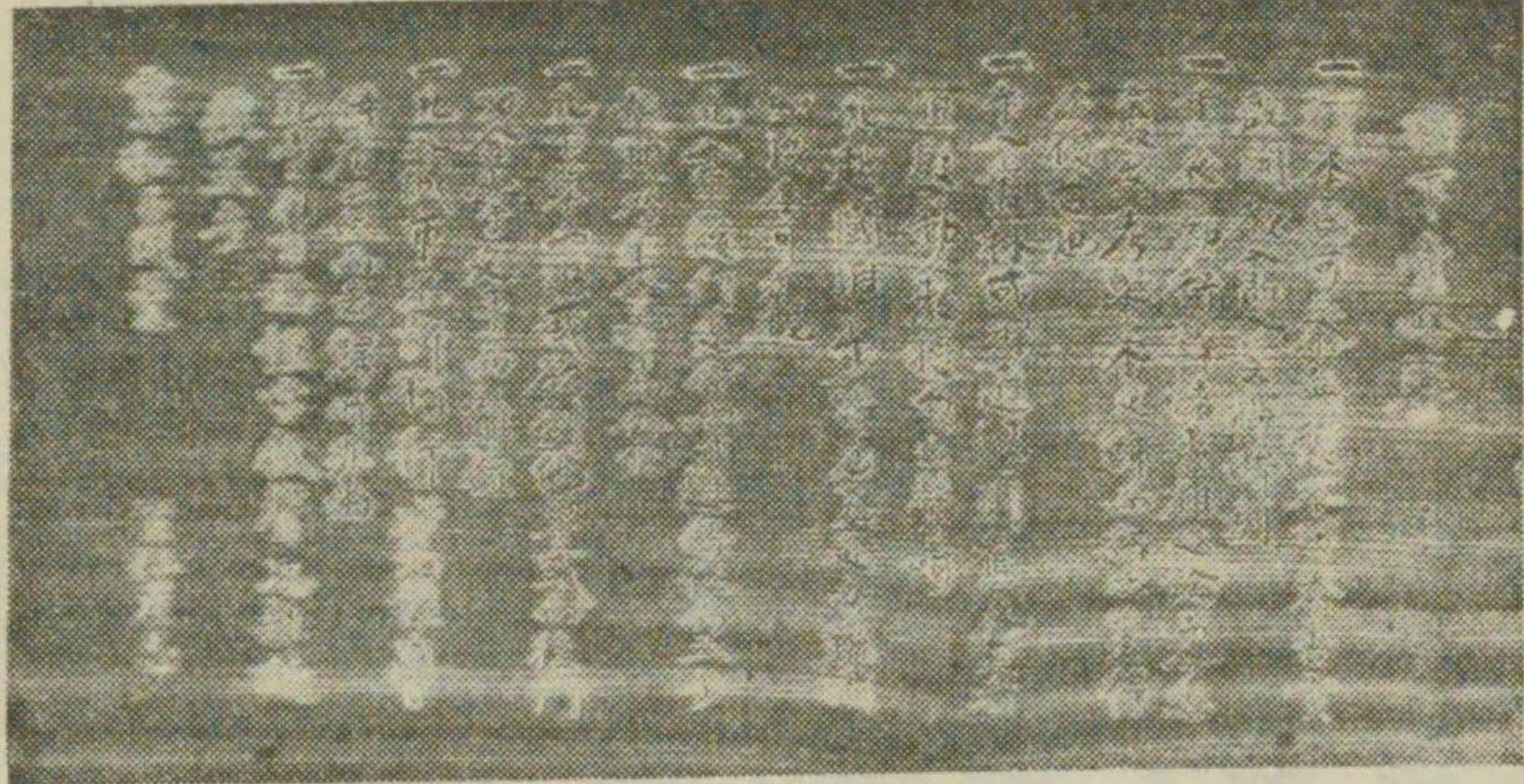
『仙厓和尚の苦禪堂』の名稱は嘖々として江湖に傳稱せられた。

此の落成は、和尚住山より十五年目の享和二年である。

和尚は『樹下一宿』と『菩提樹下成道』と二箇の因縁を取つて、之に『樹下堂』と命名し、自ら『樹下之居』の四大字を書して前門の額と爲し、略鑿を制定して又自ら額に書し、之を後門に掲げた。其額は今に儼存する。略鑿の全文を次に示す。

樹下堂略鑿

一 禪本無可參、無復不可參、吾室既開、欲入即入、奚擇時刻。
 一 晝夜勤行、詳諸吾祖之論、而今悉廢矣、考鑿本文、師而行之、奚得不復古也。
 一 乍入叢林、或失進退、則舊參之者、宜殷勤教授、勿出聲呵。



本寺藏

額掛鑑略堂下樹向和厓仙

一 凡越闕進歩、皆先左足、步驟肅如、須令可觀。
 一 凡入自後門、支合掌進、倚位而立、少低頭乃解合掌而安坐。
 一 凡下單而進、或欲到他單、或向後門、必合掌、叉手而離位。
 一 凡入城市、不許獨行、必先報直日侍者二位而去、歸時亦爾。
 一 凡堂內言語、恒常低聲、況雜談戲笑乎。

享和壬戌夏

梵仙厓志

十四法 嗣

和尚の門下には、有名な伊豫の晦巖、鎌倉の東海杯の俊傑が居たが、其法を嗣いだ者は、湛元等夷、大基○恩の二人であつた。
 湛元は和尚の愛弟子で、資性豪放磊落、少時は潜かに酒肆姪房の間に出入して、大に豪遊を縦まゝにしたものだが、或る時和尚の大慈悲に感激して、全然性行を一變し、京都に遊學して其功を積んだ。和尚は

『我が後を嗣ぐ者は唯々元か』
と人に謂つて非常に前途に囑望し、識者も亦

『教學は優に和尚を凌駕してゐる』

と迄評し合つた程であつたが、遂に和尚の印を佩びて其席を繼ぎ、盛んに和尚の門風を宣揚した。

和尚は猶も婆心の餘、文化十年癸酉の歲除に、左の一偈を示してゐる。

叢林守歲統宗猷、只要北禪露地牛、剩粟餘金選人託、傾樓破

殿待檀修

然るに湛元の性格は、偶權門の忌諱に觸れ、天保七年寺を追放せられて大島に流謫の身と爲り、後ち赦されて箱崎の長性寺に寓し、安政二年八月二十九日示寂した。

大基は福岡市外板持の莊嚴寺に住し、行持嚴肅にして庶民を教化し、嘉永五年十一月圓寂した。

十五 靖退と再住

和尚法柄を乗ること二十四年一日の如し、法席は常に隆盛を極めた。

文化八年、和尚は六十二歳の春を迎へると同時に、化權を上足湛元に譲り、虚白院に靖退して風月を友とし、松老雲間の境に於て、曠然自適せらるゝこと、爲つた。其間の詩に

虚白院閒居

活計洒然道者家、一盂午飯一杯茶、工夫豈有栽桃李、春到不妨隣院華。

山房偶成

床頭白日琴書畫、屋外青山雪月華、中有一僧洒落落、清風吹上破袈裟。
等がある、以て其心境が窺はれる。

文化十一年、開山千光祖師六百年遠忌の大會齋に當り、東席の和尚は請を受け、拈香佛事を修められた、其偈に

扶桑國裡最初禪、參去參來六百年、直飲靈源分冷煖、自知二
十四流傳。

東席に居らるゝこと二十五、六年、湛元の退院に因り、第二百二十五世として再董を餘儀なくせられたが、間もなく龍巖禪初を得て之に法を傳へ、再び虛白院の舊棲に退かれた。

或は傳ふ、和尚虛白院に閒棲中、文政七年甲申七月十四日、隣院の幻住庵惟林和尚が遷化して、後住の適任者がなかつたから、仙厓さんは三年餘り同庵に假住せられ、性山といふ後董を得て、虛白院へ還られた。因つて檀信徒の間では『幻住庵の隱居様』と呼んだ。(博多故老の談)

十六 紫衣を固辭す

曾て本山妙心寺より屢綸命を奉じて紫衣を受けんことを勧めたが、堅く辭して受けられなかつた。

又もや享和三年、本山諸老連署の勸獎狀が到達した、それに對して和尚は豫て道交ある大通和尚に書簡を呈して、飽迄峻辭し、終身黒衣の一座元に甘んじて居られた。

其高潔なる心事は欽尙するに餘ある。

十七 觀音大士の靈感

和尚が虛白院に退隱して後六年目、即ち六十八歳の文化十四年八月三日、偶沈水香を割くと、中から觀音大士の慈相に髣髴たる核心を得た。

又同日九日の事、博多の人定助といふ者が、博多海岸の砂地で拾得したといふ黄金の觀音大士像を携へ來つて、和尚に進呈した。

和尚は押し戴いてよく見ると、それは宋元時代に支那人に依つて渡來されたと

思はるゝ大士の金像であつた、和尚は此の不可思議なる靈瑞を感得せられたのである。

乃で早速其黄金佛を模寫し、且つ『觀音大士金像出現記』なる一篇を草して定助に與へ、又希望者にも之と同様のものを揮毫して與へられたと云ふ、此金像は今尚ほ本寺の法寶と成つてゐる、像の長け一寸四分。

和尚は是より厓菩薩、厓甘甘、竺厓多羅菩薩、かひ甘、甘等の落款を書畫に用ひられることゝ成つた。

謚號の『普門圓通』も之に原づくものと思はれる。

十八 潜行密用

和尚の人と爲りは清簡にして寡欲恬淡、名利を追はず權貴に媚びず、常に敝衣を纏ふて衆僧と作息を俱にし、更に名藍の堂頭たる權威を誇張せず。

佛會人天稱八萬、孔門子弟亦三千、山僧獨坐藤蘿石、時看浮

雲、横眼前。

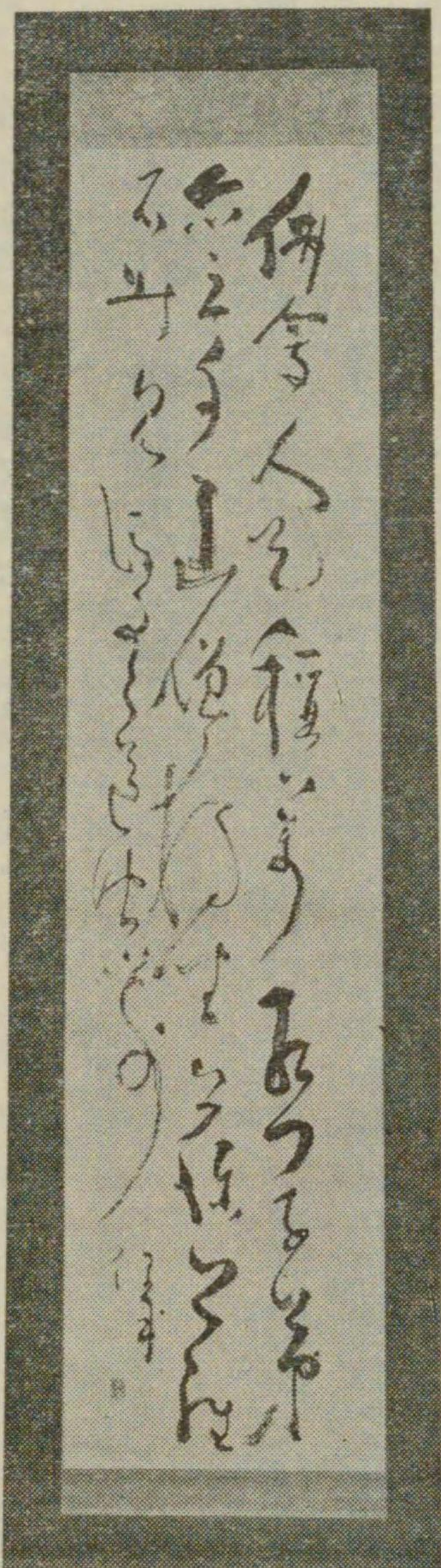
の偈を作つて自ら怡悅し

不尙豊侈、不問尊卑、不論座位、不談公事、不語人短。

の『自誠』の語を作つて自ら律す。

仙厓和尚遺墨

本寺藏



曾て人に語つて曰く、

『我れ住山以來、一微塵全體法界の句を看して、方に大徹せり』と、其長養に切なること敬仰の外はない。

683
273

然して大藏經を閲讀すること前後三回、搏飯二箇を携へて經藏に入り、終日出でずして耽讀するのが毎もの例であつた。其精勵到底凡人の企て及ぶ所ではない。以上は潜行密用の一端を述ぶるに過ぎない。

十九 書畫と文藻

十數年間、己事究明の外更に緒餘に互らなかつた和尚が何時何所で修得したものか、詩に文に書に畫に、歌に俳に茶に碁に、何でも御座れ主義の多藝多能、口を開けば警語妙句を吐き、楮に臨めば、森羅萬象手に信せて一毫端上に躍出し、専門家をして後に瞠若たらしむる底の奇才？ 鬼才？は、天稟か將た道力か、斷じて凡情の思議を許さない。其畫の如き、初めは密畫を巧にせられた様だが、俗輩の嫉視に因り、翻然と一變して、

『世畫有法、厓畫無法、佛言、法本無法』

と自ら宣言し、規矩を脱して規矩を踰えず、規矩に遵つて規矩に拘はらず、飄逸諧謔、殆んど兒戲か漫畫に等しきものなれど、其一種獨特の神技は、一條の線、一片の竹の葉にも現はれて、世の専門家がいか逆立に爲つて力んで見ても決して追隨のできない妙訣がある。

然して又之に洒脫自在なる讚語を加へて、觀る者の肺肝を剔抉せずには置かなかつた。

其威神力は聖者に非ざれば能はざる所である。

故に其書畫の揮毫を請ふ者、門前常に市を成すの盛觀を呈する程であつたが、和尚は一々快諾して之が潤筆料を求めなかつた、併し老後には其煩累を厭ひ、『揮毫せめにあひて』と題して

うらめしやわか隠れ家は雪隠か
來る人ことに紙おいて行く



と悲鳴を揚げてゐる。

八十三の天保三年壬辰秋に至り、和尚は『絶筆』として、

墨染の袖の湊に筆すてゝ

書にし愧をさらすなみ風

の歌を作つて石に刻み、虚白院の側に建てゝ、爾後は一切書畫を作らざることを示した。

左に文藻の代表として歌俳數首を紹介する。

山寺の糸櫻(維摩經の意をよめる)

天津そら花ふる寺の木の下に拂へば猶も着ける衣て

姫由利

野に咲ける千艸ながらも由りの花姫とし聞けば我は手折す

風

輕き身の人にあげられ高のぼり落ちて其身を破らましかは

老人六歌仙

しわがよるほ黒が出来る腰曲る頭かはけるひげ白くなる

手は振ふ脚はよろつく齒はぬける耳はきこへず目はうとくなる

身に添ふは頭巾襟巻杖目鏡たんぼをんじやくしゆびん孫の手

聞たがる死とむながる愚痴になる出しやばりたがる世話やきたがる

くとなる氣短になる淋しがる心はまがる口よだれくる

又しても同咄しに子を譽める達者自慢に人はいやがる

おこるなよ月の丸さもたゞ一夜

清からぬ水にこそさけ蓮子華

曲り竹直ぐな子をもて心もて

二十 接化と語言三昧



「和尚さん、何事しよんなさるとな？」

「ン、糞垂れよると！」

「空言言ひなさんな！、草取つてゐなさらうか？」

「判つとりや、訊ねんでちや善からうもん！」

(以上純博多言葉)

是れ和尚攝化の慣用手段であつた。

讚語としては、達磨大師の讚に、

「學者の學者くさきは猶可忍、佛の佛くさきは不可忍。」

盲人の讚に

「博學にして智なき者は、只是盲者の燈乎。」

鷹の圖に

「外記は馬鹿鷹が夢。」

と題して藩の家老久野外記の夢を戒む

繼子虐めの後妻を戒むべく、彼女に酷似の鬼を繪き、其讚に

「申由田甲は筆者の誤り、十點千字ハ……」

裸體の丸岩根の讚に

「酒屋を飲み倒し、質屋を置き倒し、借屋を借り倒す、これ何者乎、桶屋町の

岩根々々」

猿が虎の股間より手を出して、笥を取る圖に

「股から笥とらさるな」

と題して、笥を偷みに來る子供を戒む。

等の類枚舉に暇がない。

是は又語言ではないが、御愛養の菊の花を刈り取つて、時の藩主黒田齊清侯(乾

龍院殿)を諫めた事もある。

要するに和尚の語言三昧(文藻を)は、諧謔裏に訓戒あり諷刺あり、圓轉滑脱、奇

想天外より來り、禪機を迸發して普ねく教化を施されたものである。

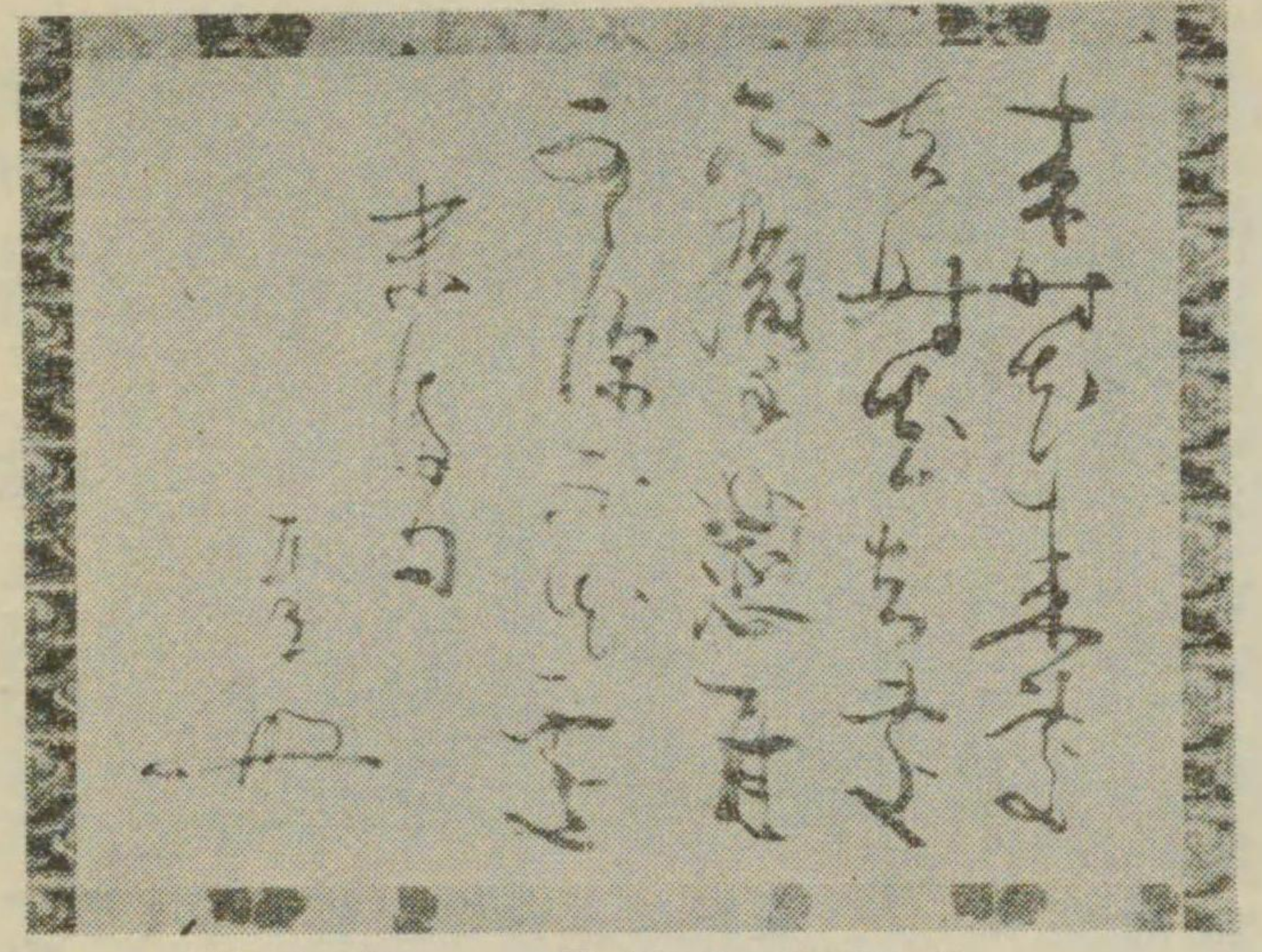
683
273

尚ほ和尚の著書としては、語録を始めとして點眼藥、觸鼻羊、百堂三書、銘記、讚語、おきうど、捨小舟、ふで草、圓通禪師遺墨等があり、近代の刊本としては仙厓和尚遺稿、仙厓和尚臍骨等がある。

二十一 交遊

和尚は玉石俱に收め清濁併せ汲む——の宏量の持主であるから、人に對して城壁を設けることなし、故に和尚の門庭に集る者は、縑としては宗の内外を問はず、素としては、居士あり學者あり、貴紳あり武人あり、醫者あり茶人あり畫工あり、詩人に歌人に俳人に商人に石工に、上は藩侯より下は呑んだくれの勞働者、裏長屋の婆アさん、鼻垂れ小僧に至る迄、和尚に取ては總て慈悲喜捨の對照ならざるはなく、たとひ塵一本でも丈六の金身であつた。それ等の姓名を一一列擧することは煩はしいから、一等に之を省く、それを知りたくば、世上の刊本に在る。

二十二 遷化



仙厓和尚遺稿 本寺藏

和尚は寄る年浪と共に、色身困憊の徵が相見え、天保八年九月、假初のいたづきの爲に床に就かれた。何分御高齡の事とて側近者は更なり、山の内外等しく憂ひの色に面を曇らせ、醫者よ薬よと心を傷めつゝあつたが、和尚には差したる苦痛の色も見えなかつた。然し十月に入つて、樹凋み葉落つる底の時節と成つて、和尚の衰弱は愈其度を進めた。七日、最早御回復の望みはなくなつた、弟子達は勿論、有縁の四衆は皆愁眉を顰めて、虛白院へと集つた。

683
273

和尚も茲に愈末期の到來を自知し給ひ、衣を更め筆を把つて、

來時知來處、去時知去處、不撒

手懸崖、雲深不知處。

と遺偈を示され、筆を擱き湛然として涅槃に

入り給ふ、塵壽八十八、法臘七十八。

斯くて虚白院裏に明星殞ち、安國山中秋風轉

た蕭颯を極めた。

諸徒は全身を奉じて、護聖院なる開山祖師靈

塔の側に清淨の地を卜し、之に瘞めて塔を建

てた。

仙厓和尚謚號勅册本寺藏

天保十二年三月廿六日

教深山大澤必生龍蛇夫筑之
聖福者一先所草創而心宗
家初道場也爰本有圓成國
師十九世正胤仙崖座元風月
胸襟烟水氣宇虛室生白施
無礙圓明機盤谷有光顯本
覺湛然德可謂憲章祖先
模範後昆身已沒紫海名
茲聞丹墀謚曰普門圓通
禪師

二十三 謚號宣下

和尚滅後、其玄德九重の上に升聞し、天保十二年三月二十六日、畏くも仁

孝天皇より禪師謚號の宣下を拜した。

仁孝天皇冊書

勅、深山大澤必生龍蛇、夫筑之聖福者、千光所草創、而心宗
最初道場也、爰本有圓成國師十九世正胤仙崖座元、風月胸襟
煙水氣宇、虛室生白、施無礙圓明機、盤谷有光、顯本覺湛然
德、可謂、憲章祖先、模範後昆、身已沒紫海、名茲聞丹墀、
謚曰普門圓通禪師。

天保十二年三月廿六日

嗚呼和尚の偉徳は、得て毀る可からず得て譽む可からず、仙厓以前に仙厓なく
仙厓以後に仙厓なし、仙厓なる哉、仙厓なる哉。

仙厓和尚竟

683
273

683
273

昭和十一年五月一日印刷
昭和十一年五月五日發行

發行所

聖

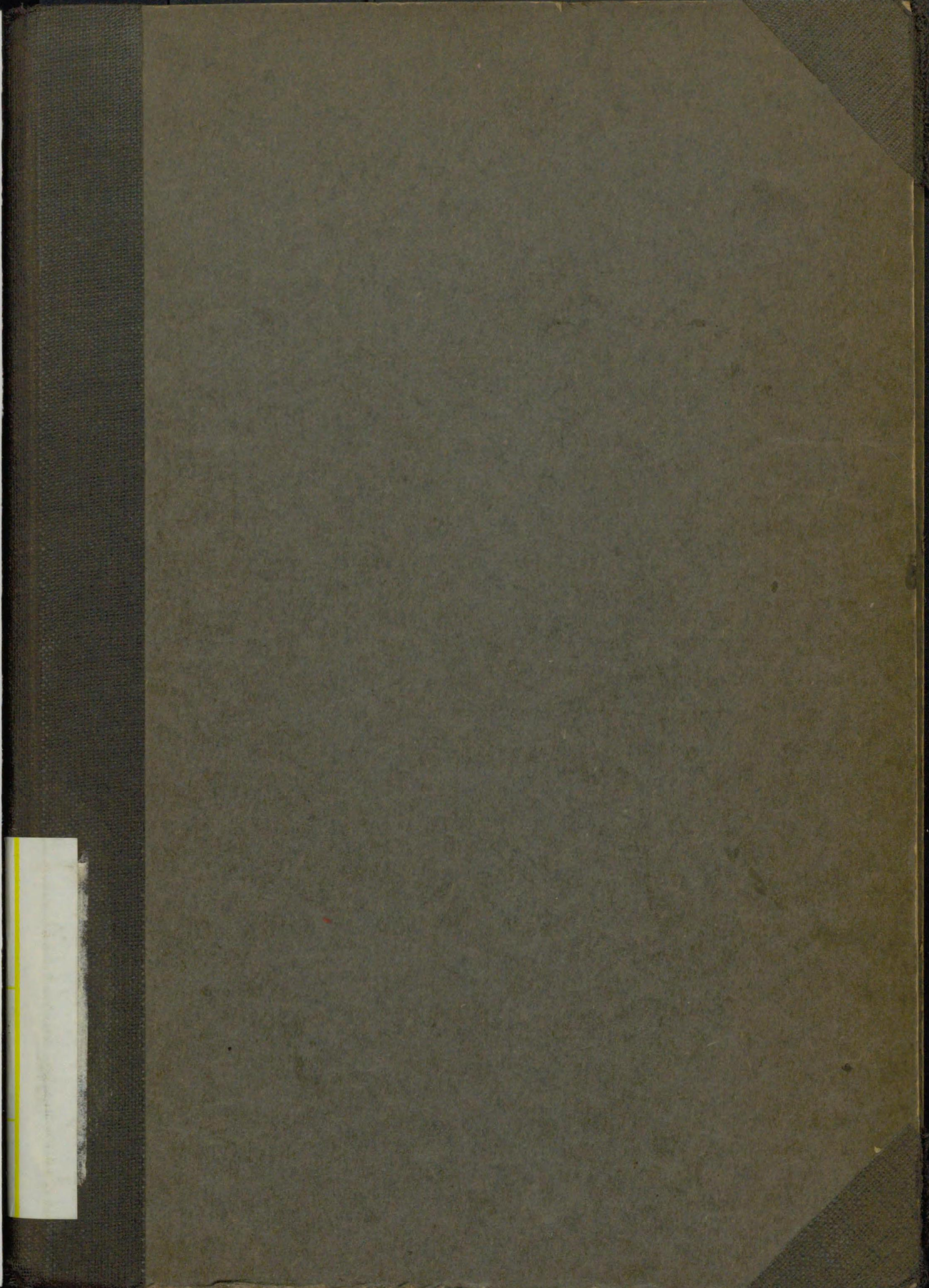
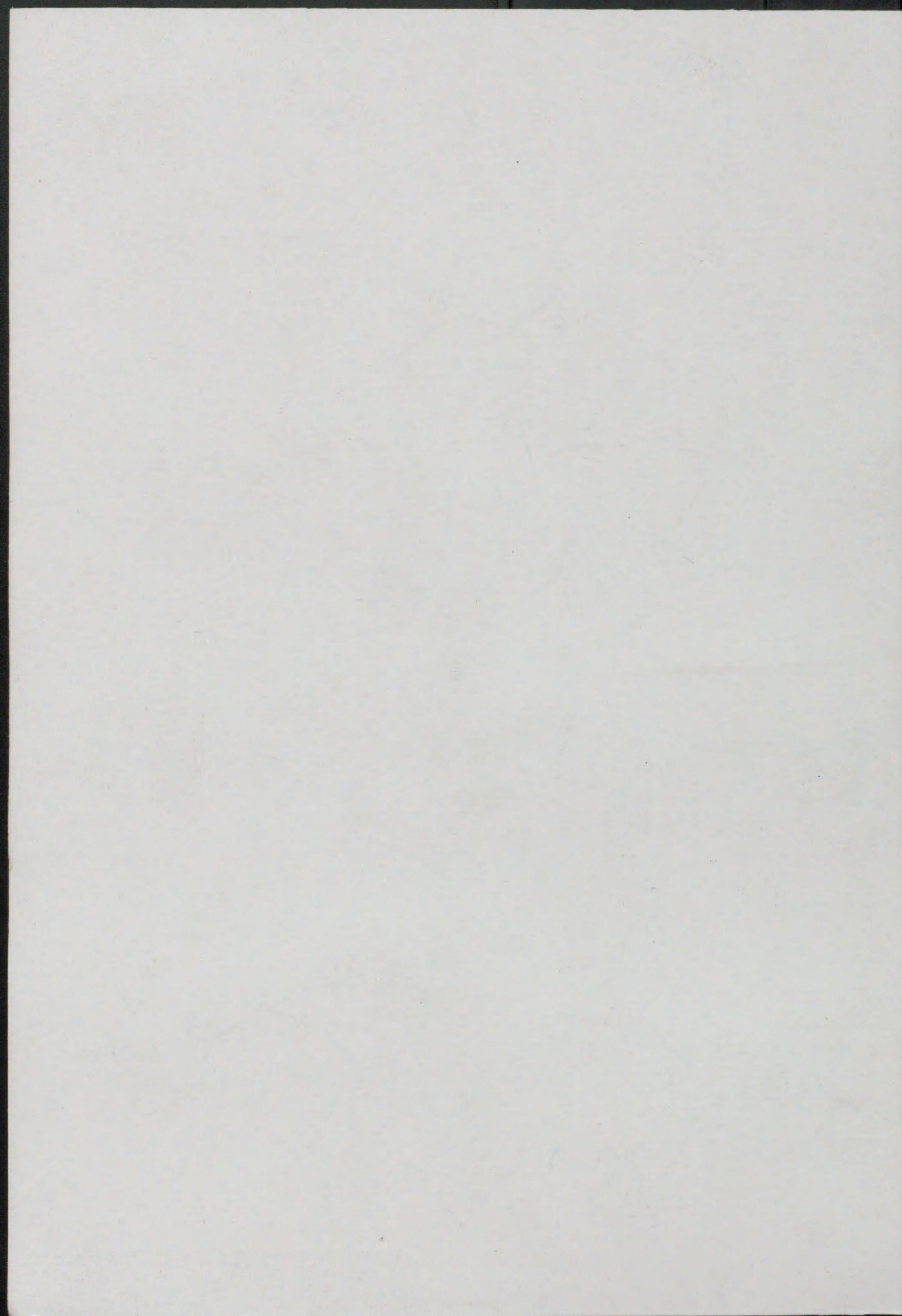
福

寺

著者 京都市上京區今出川通烏丸東入
相國寺門前町六百參拾貳番地
小島文鼎
發行者 福岡市御供所町拾參番地
龍淵猷山
印刷者 京都市下京區北小路通新町西
須磨勘兵衛
印刷所 京都市下京區西洞院通七條南
內外出版印刷株式會社

683
273



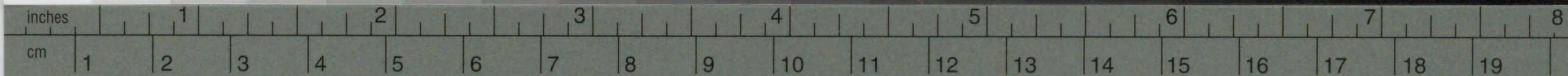


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

